# 講演３「川とのつきあい―技術と思い―」

福井県立歴史博物館 元副館長
坂本　育男　氏

坂本でございます。博物館で民俗分野を担当してきました。「民俗」というのは何でもやるのですが、この分野に従事する人間が少ないこともあって、「民」の字がつくものは何でも手を出すということをやってきました。内容は素人っぽくなってしまうのですが、だからといって福井の人間の暮らしを語るときに、民謡のことをまったく知らないで私の商売は成立しない、民家のことをまったく分からずに商売はできないというわけで、とにかく、ありとあらゆることに手を出しています。

そのなかの１ステップとして、九頭竜川では、いったいどんなふうに魚を捕ったのだろう。それを調べる機会がありました。現在、九頭竜川では舟掛けというのは禁止されています。舟の上から直接釣りをしない、あるいは、網を投げないということですが、真ん中の島へ行くためには舟がいります。ついでに途中で魚を釣る人もいますけれども。ということになると、今度は九頭竜川で使った舟はどんな舟なんだろう。博物館にいながら、どんな魚をどんな方法で捕ったか、考えてみたら私は何も知らないじゃないかというわけで必死になって調べました。それがいまから 20 年ほど前のことです。

川の性格　―伝説、行事、行為からの解釈―

川というのは人を結び付けるものであると同時に、私たちのような民俗、人は何を考えてきたかという立場から言いますと、河原は自由な場だと、考えることができる。「自由な場」というのは、ちょっと大げさな言い方ですけれども、われわれの日常が及びがたい、しょっちゅう洪水に襲われるから、田んぼにしたってしようがない。じゃあ、放っておこうか。あまり日常の生活に関わらない空間であるということで、京都の鴨川だったら芝居小屋が建った。足羽川の河原ではサーカス小屋ができたり、芝居小屋ができた。それから夕涼みに行った。現代で言うと花火を上げる。いくつもあるわけです。さらに、利用価値がないということで、もし田んぼをつくる人があっても、あまり課税をしないというようなこともあったわけです。

けれども、現在なりますと、ごちゃごちゃした街の中で、あれだけ広い空間があるじゃないか、もっと大事に使おうということを考えました。私が住んでいるのは森田ですけれども、つい 15 年前まで、堤防内の河川敷は草ぼうぼうで、やぶがいっぱいでした。ところが見る見るうちに国土交通省が、やぶを刈り払って芝生にして、いまはゲートボールをしたり、あれこれしております。ずいぶん景観が変わったわけです。

それから、勝山の弁天桜。あれは堤防の上にサクラを植えたわけですけれども、あそこの堤内も、公園を整備する前までは田んぼがあって、左義長の火も、その田んぼでそれぞれの地区が勝手に燃やしたのです。そこをきれいに整備して公園にした。じゃあ、ついでに左義長の火も、もう少し儀式的にやろうよというので、いろいろと変化をしていく。河原というのは、まずそんなところです。

この話を持ち出そうと思ったのは、先日博物館においでになった中藤島の方の話がきっかけです。「中藤島では飯を炊くのに、わらを燃やしたんだよ」と。で、「わらだけですか。」と尋ねると、「違う。九頭竜川で拾った流木も燃やしました」との答。ですよね、中藤島は木があまりないから、わらも燃やす、流木も燃やす。

流木は誰のものか。上の人がうっかり流してしまって、所有権が明確なものは勝手に拾うことはできませんけれども、山から流れ出してきたものは、最初に見つけた人の勝ちです。あまりにも大量に拾い過ぎて持ち帰れない場合、その流木の上に石を一つ、ちょんと置いておくのです。そうすると、これは先に見つけた者がいるから、後から来た者は手を出すなという約束があります。

もう一つ、川というのは、あの世とこの世とつなぐという性格がある。

勝山の「滝波のお面さま」の伝説、あるいは、森田の八重巻の重陽寺の伝説。これはいずれも本に掲載されています。荒ぶる仏様、神様がいて迷惑するので川へ流しましたよ。あるいは、その神様が下へ行きたいというので、包んで川へ流しましたよ。そうしたら下流の人が拾い上げて、それをお祀りして、現在まで続いています、あるいは、大変ご利益のあるお寺になっています。そういうことを物語っているものです。これを上流の人から見ると、滝波のお面の場合、川へ流した小原の人はあまりにも祟りをするお面さまを、少なくとも自分の生活圏外へ放り出してしまう、という意味を持ちますよね。逆に下流の滝波の人にしてみると、上にいくつかの村があることは分かっているけれども、川という通路を通じて、神の世界から尊いお面様が現れたのだということになると思います。そういうふうに霊的なものの出現というのは、「桃太郎」もそうですし、「瓜子姫」もそうです。

もう少し実際に見られる行為では、残念ながら九頭竜川にはほとんどなく、若狭の北川の例をお話しします。北川では盆の８月 15 日の夕方になると、盆棚へ供えた花や果物を持って川へ行きます。そして、お経をあげ、お供え物を流すのです。これは、盆にお迎えしたご先祖の霊を、あの世にお帰りいただくために川へ流すということなのです。これも、川があの世へ通じているということです。これと同様なことは、越前では、武生ですと、７月 15 日と８月 15 日に灯籠を流すということが行われていますし、福井市では、二日市の辺りで盆の舟をつくって流すということが行われております。

ところで、どうして永平寺町は、大灯籠流しというやつを始めたのか。私たち民俗の人間にしてみると、本来、盆の灯籠流しはご先祖を迎えて、いつまでもいてもらっては困るからお送りするということなのですけれども、永平寺町では 90％ぐらいまで浄土真宗の方です。ご先祖さまをおうちまでお迎えしていない。それにもかかわらず流すのは、これは何だろう。ちょっと理屈っぽくそういうことを考えます。だけども、犠牲者の供養になるとして、広島で原爆忌に灯籠を流す。新しい民俗的解釈によっているのでしょうが、川で行うことに意味があるのかもしれない。永平寺の大灯籠流しも、そんな影響を受けているのかもしれません。

さらに言うと、川はあの世そのものとも言える。今年の８月７日、福松橋を車で通過しましたら、河原に消防車が３台ばかりおりていて、下流には救急車がいる。こんな静かな日に事故でもあるまい、どうせ訓練だろうなんて、のんきなことを言って帰ったのですが、博物館へ帰ってネットで調べたら違いました。遊びに来ていた人が、あそこで水死してしまったのです。そういうことがありました。河原や川では開放感をもって自由に遊ぶことができる。だけども、それはあるときに、あの世そのものになってしまう。これは車がいつでも凶器になり得るというように、性格の変換が、川でも当然起こるということですが、川はあの世そのものでもあるわけです。

川は、開放感があるということで、現在も川の整備が、うんと進められています。実は、私は山の中の人間です。川も本当に小さな川しかないようなところだったのです。こちらへ来て、九頭竜川はちょっと大きすぎて親しみは感じないのですけれども、九頭竜川の支流では、すぐ近くに家があって、大きなケヤキが川を覆っている。そんな景観があちこちにあります。あるいは、用水が村の中を流れていて、橋がいくつも架かっている。そこのところに、また木がおいかぶさって、独特な景観をつくるわけです。そういう点から申しますと、川や河原をいかすことをもっと考えてもいいのではないかと思いますし、現に勝山とか、ほかのところともいろいろとやっております。

この話は、この程度にしますが、もう一つだけお話しします。川はあの世そのものとお話しましたが、皆さんのところにはカッパはいなかったでしょうか。私のところは小さな川しかなくてカッパはいませんでしたが。ごめんなさい、イヌ好きの方、ネコ好きの方には大変失礼ですが、イヌの子、ネコの子が生まれると、川へ流さなかったでしょうか。そんなことは、かつてはごく当たり前だったし、ゴミがあると、すぐ流してしまう。古い東北地方の民俗誌を読むと、間引きをした子どもを菰に包んで流したという例までありました。川というのは、目の前にある不都合なものを送り去ってしまうとために、しょっちゅう使われたのです。こういう話をすると嫌われるので、この程度にしておきます。

九頭竜川の舟

次にやったのが舟です。私は山の中の出だから、舟なんていうのは、ほとんど興味がなかったのですけれども、福井県へ来たら嫌でも舟を見なければいけない。仕方なくいくつもの舟を見たのですけれども、さて、ご覧になってみてください。

スライド２、スライド３ は小舟渡の舟橋です。不要になった高木あるいは森田の舟橋の鎖を買ってきて、勝山のところに舟橋をつくったのです。この舟、現在、九頭竜川で使われているボートとまったく形が違います。舳先が大きく跳び上がっているのです。流れが速くても、舟が水面に浮かび上がって、しぶきが入ることはないはずだから、こんなことをする必要があったのだろうか。

では、森田の舟橋の舟はどうか。スライド４は明治のごく早い時期の、コンストラストがほとんどないような写真なので、極めて見にくいのですが、左側に舟があります。これが舟橋の舟かなと思ったのですが、これは舟橋で遡行を止められた、荷物輸送用の舟です。右側に舟橋の舟がありますけれども、写真にちょっと跳び上がっているように見えるところがあります。まだ十分に検討していないのですが、これは小舟渡の橋と同じように、高く上がった舳先が写っているのかもしれないな、と思うようになってきました。

では、橋ではない、ほかの舟はどうなんだろう。スライド５は森田で、地震の前に舟遊びをしていたときの舟です。舟縁が、舳先から少し後ろで角ばって曲がっています。お配りしてある資料ではＡの舟です。この角ばった曲がりは、福井市の荒川の小さな舟（スライド 6）でも見ることができます。スライド７は足羽川の荷物輸送用の舟です。福井と三国を往復した舟です。人とサイズを比べてください。こんなに大型です。この舟は一晩中かかって三国まで下りますので、中でご飯も炊けば、人も泊まれるという大型の舟ですが、これにも舟縁の角ばった曲がりがあります。輸送などの舟は舳先は高く上がっていないが、多くのものに舟縁の角ばった曲がりが見られます。

よく見られる木造の舟は、「ちょう」とか「かわら」と呼ぶ底の板を敷いて、その上に板を無理やり曲げながら合わせていきます。無理やり曲げたり捩じったりした板を留めるために、舳先のところに、水押という太い材を取り付けて、舟釘でうちつけます。側面の板は艫から舳先まで１枚の板ですから、角ばった曲がりはできない。とすると、このような角ばった曲がりがあるということは、側面の板が一続きでなく、曲がった位置で接ぎあわせているということなのです。

スライド 8、配布資料のＡ（p.37）をごらんいただきます。九頭竜川の舟は、「ちょう」も途中で切って、舳先側に別の材料を接ぎ合わせてあるのです。

そして側の板も、「ちょう」の切れ目とずらした位置で切れていて、舳先側には別の材料を接いでいる。そうすると、舳先側の側の板は、無理やり曲げたものと違って、あまり力がかからず、水押材は不要で、左右の板を合掌するように釘で留めることができる。その代わり、今度は板の接ぎ目が弱いので、舟縁の上にブーメランのような形の材料で押さえています。

さらに、「ちょう」と側の板の取り付け方。海の舟でしたら、「ちょう」は、水押材の下まで伸びていますから、側の板をとめる舟釘は横から打っているだけです。ところが、九頭竜川の舟は、「ちょう」のつなぎ目までの艫側は横からくぎを打っていますけれども、舳先側は、なんと下から舟釘を打ち込んでいる。こんな構造です。

実のところ、もう少し精密に見なければいけないのですが、私がいまから 15 年、20 年前に九頭竜川をかなり見て歩いても、舟橋と、もう一つ下流の中角橋のところにひっくり返したような舟しかなくて、しかもペンキをべたっと塗ってありました。どう釘を打ってあるか、どう板を接いであるか、十分に観察できなくて、はっきりしたことは言えないのですが、少しだけ考えていることがあります。九頭竜川の川舟は、海の、丸木舟の系譜を引く、ドブネと同じ技術によって作られたのではないか。

ドブネは敦賀湾にも能登にもありました。ドブネでは「ちょう」に側板を直接とりつけるのではなく、間に樋のように刳った「おもき」という部材をおいて、「ちょう」と「おもき」、「おもき」と側板を接合しています。樋の形ではカーブさせることなどできませんから、側板も一続きにはで

きない。側板はほぼ直線で、舳先だけ別材を接いでとがらせています。

では、石川県の川舟はどうなんだろう。そんな問題がありますが、一応、側板も「ちょう」も途中で接ぎ合わせている舟が九頭竜川では主であり、さらに舟橋に使われた舟は、しぶきの入る、あるいは荷重がかかって舳先が沈んでも水が入らないように、舳先をもう少し持ち上げた。これは側板が一続きではできないことです。データが少なく、結論ではありませんが、そんな予想をしています。

九頭竜川の川舟は、河口の新保で作ったり、後には森田でも作っています。さらに、後になると、無理やり勝山まで引っ張り上げていって、そこで砂利舟に使った。いろんな用途がありました。勝山では私たちが舟のあることに気がついて、ちらっと見せていただいて３カ月ばかり経ってもう一度行ったら、とっくになくなっていました。邪魔だから燃やしてしまって。ほかの舟も腐ってなくなってしまいました。そんな状態ですから、データを集めるのも難しく、技術の系譜はいつまでも、予想の段階にとどまっています。

魚捕り　ー技術とエピソードー

最後に魚捕りのお話をさせていただきます。アユは分かると思いますが、私はサケとマスの区別も自信がありません。海の魚もあまり区別がつかないし、川の魚を見たら、もっと区別がつかないという状態なのですけれども、漁師の皆さんは、魚の区別、魚の捕り方は自明の理なのです。私は両方とも分からなかったから、仕方がない、もう魚は名前だけで処理して、これまでの人が、どんな捕り方をしてきたのか。とにかく自分が理解できるだけでも記録したいと思いまして、河口から、旧和泉村まで、あちこち聞いて回りました。

どんな魚を捕ったか。皆さん、フナはお好きですか？ナマズはお好きですか、食べますか？いまの越前の人だったら海の魚をたくさん食べるから、「コイなんか泥臭えだけだ。ナマズ、あ、昔はそんなもの食べたのう」と言うんでしょうけれど、かつてはそうではない。特に内陸の人だったら、ナマズは土用のときに、喜々として捕りに行って、それを焼いて食べた。コイだったら、昔の都びとには、魚といえばコイに決まっている。海魚ではない。だけど、越前の人は海魚の方がはるかにおいしいと思っているんでしょうね。だから、あまり食べない。

それで、いまも盛んに捕るアユと、かつてはよく捕ったマスとサケ。ついでにアラレガコにふれます。

アラレガコは、味はどうなんでしょう。おいしいのでしょうか。ここだけの話ですけれども、あるとき松岡で魚屋さんと話したことがあります。その魚屋さんのところに、よそから有名な人が来て、アラレガコは越前では有名だから、ぜひとも食べてみたいと言う。　せっかく来てくれたお客さんだから注文にお応えしたいのだけれども、手元にアラレガコがない。どうしよう、仕方がない。そこにあったウグイをちょんちょんと切って出した。お客さんは、「はあ、さすがにアラレガコというのは珍味だな」と。

越前の人はウグイなんていうのはばかにしています。魚捕りの人は、「あんなものは、おしめを洗っていると最初に来るやつだ」と言って捕りもしない、売れもしないから。上流の人も、捕るには捕るけれど、ちょっとした餌をやっておくと、すぐに寄ってくるばか魚ぐらいにしか思っていません。味がいいとは思っていない。だけども、かつては、手近にいた魚は何でも捕った。その中でアユ、マス、サケ、それからアラレガコなどが商品価値があったということです。

アユの捕り方には、いまもいろんな捕り方があります。友釣り、サンギリ。いまはＮＨＫではイナワ（威縄）と言っていますけれども、20 年ほど前までの本は、必ずさんぎりと書いてありました。いつからイナワになったんだろうと不思議に思っています。それから、網で捕る幾つかの方法がありますがこれはちょっと省略致します。

スライド９はアユ捕りのサンギリです。スライド 10 のように投げ網を投げてアユを捕る。これは大学のすぐ近くにもあり、皆さんもご存じだと思いますので飛ばします。

簗は、もう本当に観光客向け、遊びのための漁法です。県内では２カ所か３カ所しかありません

でしたけど、経費が掛かり過ぎるので、もう行われていません。

マスは非常に重要な魚で、先ほどもお話がありましたので、少々お話しさせていただきます。上がってくる２月の初めのころから、三国の河口から日野川合流点付近まで、流れが静かなときは、川岸から舟を出して網を下ろしていき、そして揚げるという地引き網。配布資料のＤ（p.38）です。水が多く流れてきたら、刺し網を流す流し網。これをしょっちゅうやっていて、下流で、ちょっと魚を釣っているようなむらだったら、そのむらの半分ぐらいの人が、これに従事していた。春になって流し網や地引き網ができるように、その前にはみんなで共同で古網や綱だけ流して、網に引っ掛かる木や石がないか探して取り除く。そんな作業をしていました。流し網や地引網は、１回の操業は 20 分か 30 分なのですけど、みんながやるものですから順番を待たなければならない。それで待つ間、舟に乗って大きなサデ網を川へ突っ込んで、川の流れに乗り切れなくて隠れているマスをひょいとすくい上げる。そんな漁法もありました。

中流では夏になるとマスは淵なんかに潜っています。そこで、淵の下の方のセ（瀬）に下の網を川幅いっぱいに張る。上の方から網を引っ張ってくる。私の身長をはるかに超えるような深い淵もある。そこでは人が潜ってでも網を広げてマスを追う。大勢で網を引っ張ってきて、淵の中にいるマスを下のセに追い詰める。網が狭くなったら、そこへ投網を打つとか、あるいはヤスで突いてマスを捕る。こういう漁法がありました。ひきずり網という漁法で、配布資料のＥ（p.38）です。

職漁者にしてみれば、アユの方が商売になるので、これはレクリエーションみたいなものだと言うのですけど、大きなマスが捕れて面白いのであちこちで行われていました。だけど網の障害を除こうとして淵にもぐって、網に引っ掛かって死んでしまった人もいた。こんな話もききました。

網は大がかりになりますので、もう少し楽にやろうと思ったら、夏の間、淵に石をどぼんと放り込む。そうすると、マスは怖がって川の真ん中や岩かげへ隠れる。そこのところへ潜っていって、やすで突く。これはあちこちでしていました。

それから、卵を産むときは、Ｌ字形で、短い方に返し付きの刃をつけたかぎかぎを川底へ伏せておく。おとりのメスをつないでおいて、オスがよって来たら、きゅっと引っ掛けて捕る。これもあちこちで行われていました。この方法はサケを捕るためにもつかわれました。

さて、スライド 11 が上流域では落ちアユを捕り、この辺りだったら落ちアユも捕るし、アラレガコなども捕ったエバ、全国の共通名で言うと、うけ（筌）です。人の身長よりも高い口径です。それ流れが急なところに、垣を作って仕掛ける。９月ごろになって落ちアユが来ると、この中に入るわけです。あまりに急な流れですから、これもうっかり転落してあの中に飲み込まれたら出ることができません。そういう恐ろしいものです。

でも、これが大量に捕れて、例えば一晩にアユが 200 キロも捕れたとか、アラレガコは１日３匹も捕れば１日の日当になるのだけど、そのときに一晩 30 匹も 40 匹も捕れたとかいう話もあるのです。これだけ大型のものは全国的に見てもかなり珍しいようです。

スライド 12 は、松岡の近辺で、主に冬になってアラレガコを捕る少々小型のものです。長い竿の先から何本ものエバを吊っています。スライド 13、スライド 14 は 20 年ほど前ですが、この大学の近くで川を見ていたら、変なものがあるなと思って近寄っていきました。そうしたら、公園にあるごみくず籠に網を取り付けて川に吊り下げている。これはエバなんです。カントウエバ（竿頭エバ）ということで、配布資料のＧ（p.38）にお示ししてあります。

最後に、山間の漁村とも言える、大野市の下打波と仏原で行われた走り川漁についてお話しします。

こちらから行きますと、勝原のスキー場の直下辺りで、九頭竜川が１メートルほど滝になっています。その滝を魚止めの滝と言います。下打波と仏原の人は、その滝の上に大きな丸太を重ね上げて、滝を高くして、魚が跳び上がりにくくする。

フキの葉が二銭銅貨ぐらいになったらマスが上がってくる。あるいは、ウツギの花が開いたら、アユが上がってくると言ったそうです。

下打波も、仏原も、ほとんど平地のない山間地ですから、焼き畑の出づくりをしていました。４

月、5月になると、みんな家から離れた山に入ってしまうのだけれども、走り川の漁をする番の日になると、山からわざわざ下りてきてマスを捕り、アユを捕る。

どういうことをやるかというと、滝を跳び越えようとして、マスもアユも勢いを付けて滝壺を泳いできて、ぴょんと跳び上がろうとする。その跳び上がろうとするマスを、跳び上がる直前のところに大きなタモを立てておいて、入ったらすぐに、ひょいっと上げる。

どれだけ捕れたかという話は、また人によって違うのですが、1日に100本捕ったとか、200本捕ったとか、アユになると、それこそ滝壺にオタマジャクシのようにいたとか、うっかりタイミングを間違えると、入りすぎて上げることができなかったとか、いろいろと言うのですけれども、とにかくたくさん入ったのでしょう。商売にもなりました。明治末の『大野郡誌』も昭和初期の『阪谷五箇村誌』も取り上げ、相応の金額を記述しているのです。

ちょっとエピソードだけお話しします。この漁をした人が、いまから20年前にはご存命でした。その人から伺ったのですが、走り川漁をしているところへ学校帰りに立ち寄った。そうすると、大人がマスを1本ぽいと投げてくれて、それを串刺しにして焼いて食べた。小学校の子どもがマス1本ですよ。

子どもがマスを1本も食べると、今度は、マスに酔うと言って、何か気分が悪くなったんでしょうね。そこでマスに酔った子どもを直すには、家の涼しい方へ頭を向けて、その上にマスを捕るタモをかぶせて置いておくと治るのだと。これが一つ。

二つ目、マスはしょっちゅう捕ったので、刺し身にして食べた。鉈で、ちょんちょんと切って、生魚を食った。そのためにサナダムシが体にわいて、兵隊に行くまで、もうひどい目に遇った。こんな話を聞きました。

その方は、90歳ぐらいになっていて、よそへ移住していたのですが、私がお訪ねしたときに、懐かしそうに、本当にビール瓶の底みたいな眼鏡で、いきなりアポもなしに行ったのですが、次から次へと話してくれました。

いまのは、エピソードの中のほんの二つです。まだまだありますけれども、ちょっと時間がオーバーしていますので、これでやめておきます。

いずれにせよ、われわれは、かつて川ともっと深く付き合っていた。民俗というのはかなり甘い世界なんですけれども、だけども人はどういうふうにして具体的に付き合ってきたか。どんな思いをしてきたか。まだまだ私たちは知らないことが多いし、技術に至ってはもっと分からない。いろんな知識が失われていく。そんな思いがありますので、ばかなことばかり言っているとお思いになったかもしれませんが、私たちはこういうデータを幾つか積み上げてきたというわけです。

以上で私の話を終わらせていただきます。

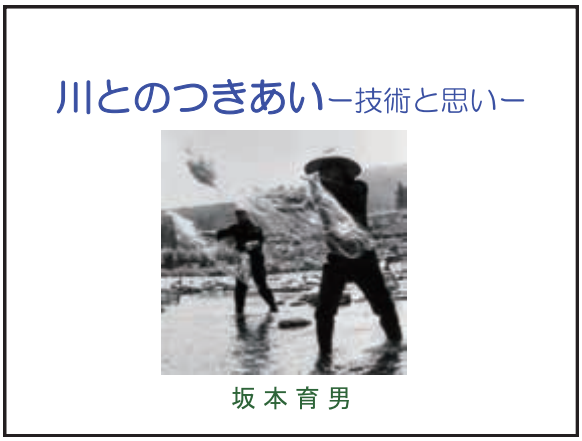
○司会

どうもありがとうございます。

川と人との関わりが、人間同士の関わりだけではなく、異界とのつながりを持つものである。同時に、現実的には舟を使う、あるいは魚を捕るというかたちで、いかに川を利用しながら生きてきたのかというのを、物質文化という具象物を通して示してくださいました。

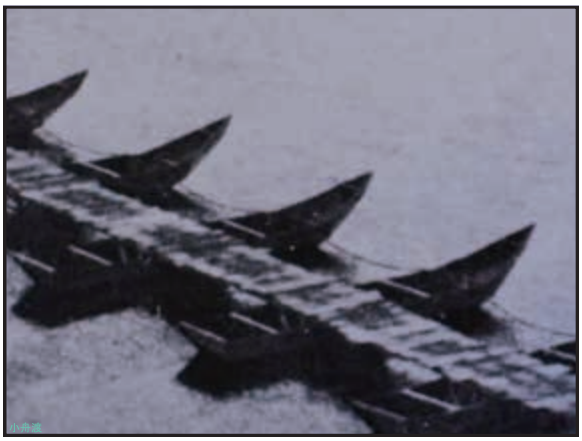
# 講演３　スライド資料

スライド１




スライド２

スライド３



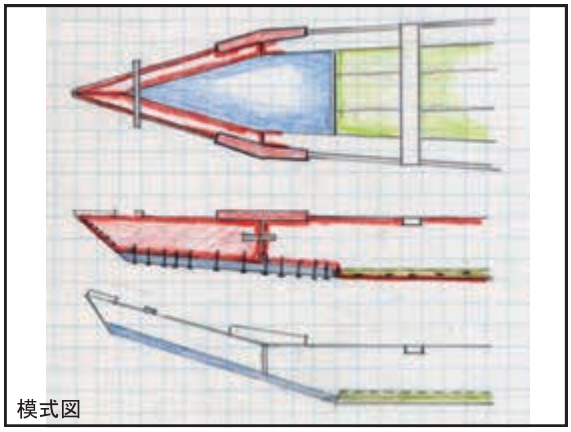
スライド４

スライド５

スライド６

スライド 7

スライド 8




スライド 9

スライド 10

スライド 11

スライド 12

スライド 13

スライド 14

# 配布資料　3　川とのつきあい―技術と思い―

**坂本 育男 氏**

## 1. 川はどんな場所か

| | |
|---|---|
| 川を町づくりに活かす活動 | 旧松岡町の筏コンクール・九頭竜川大灯籠流し<br>集落内の水路のもつ雰囲気 |
| 川原（河川敷）を活かす活動 | 福井市街地の足羽川・森田の河川敷整備<br>鴨川 |
| 川原（河川敷）という境界の空間 | 社会的規制の弱い空間<br>芝居小屋　　刑場　　流木や石を拾う |
| 川に物を流す | 川は異界への（からの）通路　　あるいは異界そのもの |

勝山市滝波のお面様　（村岡村誌稿　『越前若狭の伝説』）

むかし平泉寺焼き打ちの時、北谷小原の者が、七つのお面を盗んで来た。宴会の時、若者が面をかぶって踊ったが、三つの面だけは顔にくっついてどうしても離れない。無理にとったら若者の顔に傷がついた。若者は怒って面を滝波川に捨ててしまった。

天正２年、正月十一日滝波の名主の多田太治衛門が、川を流れてくる三つの面をみつけた。これを拾い上げようとすると、面は三本足の烏になって、流れ着いた田のまわりを飛んだ。よってこれをあがめ、その田をお面田と決めて、毎年その日にお面祭を行う。小原では面のたたりがあり、火事にあうといって、今も町にたきぎを売り出さない。

福井市八重巻「重陽寺縁起」　越前市国中の獅子頭　鯖江市川島の面など

上流で荒ぶる神を流し、下流で拾い上げて祀る伝説　いくつもあり

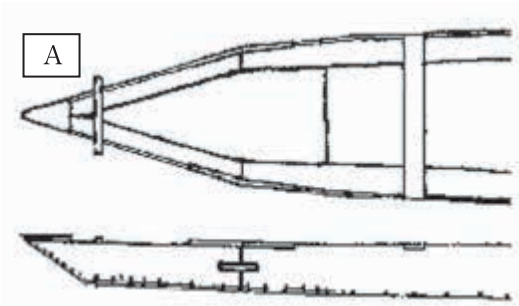
| | |
|---|---|
| 川へ流すもの | 虫送り・七夕の笹　疱瘡流し<br>高山の白線流し |
| 川をとおして送るもの | 精霊 |
| 川にすむ異界のもの | かっぱ　椀貸し渕　　川での水死 |

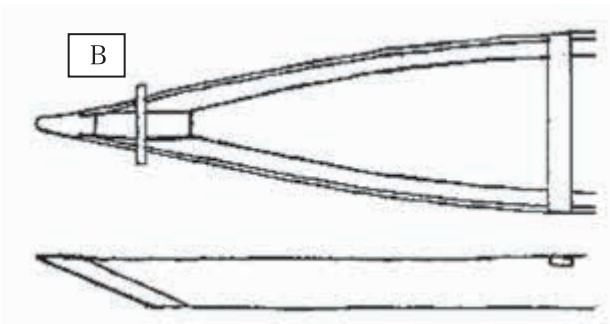
川の規模や住居との距離により、イメージが大きく異なる

## 2　九頭竜川の舟

① 舟橋の舟　　森田の舟橋・小舟渡の舟橋

② 漁の舟（砂利舟）　水押をもつ舟と水押のない舟



③ 農耕用の舟　C
④ 河川輸送用の舟は水押しのないタイプ？

C

## 3　九頭竜川の漁師たち

海が近く川漁はめだたないが、漁が盛んに行われた

どんな魚をとったか

松岡の専業者　　マス、アユ、ウナギ、川エビ、ナマズ、
売れない魚　　コイ、フナ、ウグイ、モクズガニ
他の土地では　　サケ、アラレガコ、ウグイ、アマゴ、ゴリ、イシブツ、イワナ、
アジメドジョウ、ドジョウ、スズキ、ヤツメウナギ

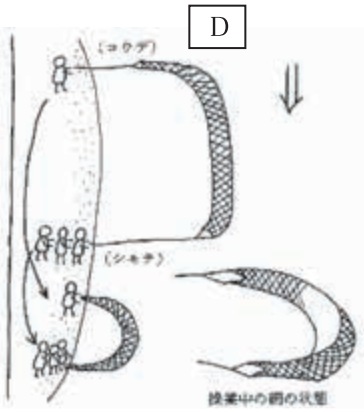
アユの取り方

下流域：　アユメザシ
中流域：　トモヅリ、マキアミ、サンギリ（威縄漁）、鵜飼　エバ
上流域：　ニゴリカキ　マキアミ、アユジゴク、ハシリ

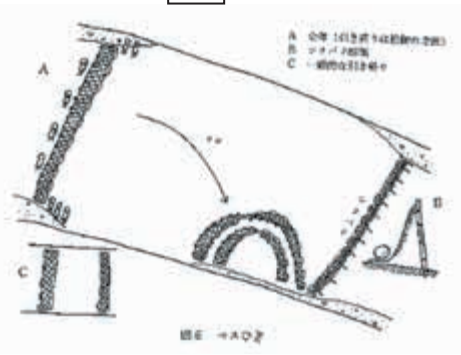
マスのとり方

下流域：　地引網　流し網　待ち網
中流域：　マスの曳網（ヒキズリ、マスアミ）、ヤス突き、スリカギ　袋網
上流域：　投網　ハシリ

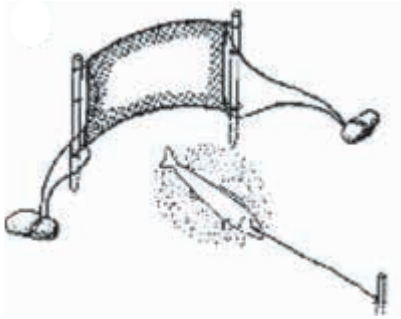
D




E

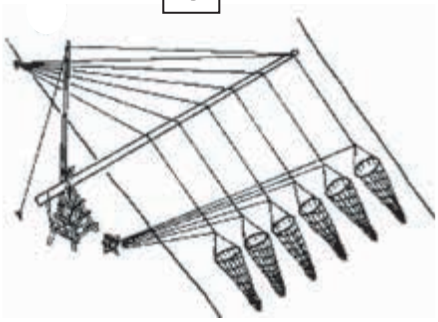


F



落ちアユ・アラレガコを取る　　エバ
大型の筌、中流域の漁法

G



ハシリカワ
滝を越えようとするマス・鮎を取る　（大野市下内波仏原）
山間に漁を重視するむらを生み出した